

## 運と縁

内山徹郎

私たちは日々の生活の中で運とか縁という言葉を使うことがあります。

そして、しばしば混同して使われることがあるのではないのでしょうか、そこで少し考えてみたいと思います。

運と言ったとき、どんなんことを思っているのでしょうか。運が良かった悪かったなどとはよく言う事だと思います。

その運という言葉には前提があるのでしょうか。

それは、あらかじめ決まった人生、いわゆる運命というものを思っているでしょう。

あらかじめ決まっている人生の中で、自分にとって都合がよいことがやってくると、運がいい、都合が悪ければ運が悪いと言い、自分を振り回していることがあるのではないのでしょうか。

しかし、お釈迦様は、物事は縁によって起こるので、初めから決まっている人生はなく、ただ行いによって決まっていくと言われます。

単純な言いかえであります。私たち真宗門徒において運とか運命などと表現するとすれば、それは阿弥陀仏が予め私たちを助けようと願いを差し向けている事を言うのではないのでしょうか。

既に救いの手が差し伸べられているので運がいいのです。

あとは私が「南無阿弥陀仏」と念仏を申す事。つまり応じるのか、応じないかの自覚の問題です。

では、縁とは何でしょうか。正確には縁起と言います。

それは、関係が結ばれることによって物事の性質が起こってくることを言います。

例えば、よく言われるのは、親という性質は子がいなければ成り立ちません、親子関係の中で親としての自分が育まれていきます。

関係が先で性質は後と言う事です。

それは、阿弥陀と私が関係することによって、私の性質が変わっていくと言う事ではないのでしょうか。つまり、お念仏を申して生きる私になると言う事です。お念仏は阿弥陀におまかせする心の現れです。

阿弥陀に應じる何かがあると言う事です。

「良かれ」と思ってする行為は実は自身の利益が最優先されていたと気づくことがあります。

「良かれ」がままならないのが私です。そういう自分を省みて、良いも悪いも自分であると受け止めさせて頂くことになるのではないのでしょうか。